

## 2020年4月26日聖餐式説教

復活の主イエスとの出会いの体験は、様々な形で、その人に最もふさわしい方法で訪れました。聖書はその体験を広い視野から私達に伝えております。本日は、ルカによる福音書から、復活の主との出会いの体験を学んでみたいと思います。

主イエスには十二弟子の他に七二人の弟子たちがいたと記されております。本日の福音書の前の部分に、クレオパという弟子ともう一人弟子が出てきますけれども、おそらく十二弟子の次に重んじられていた弟子の中の一人ではないかと思われまます。二人はエルサレムから約十一キロ離れたエマオという村へ向かっておりました。

エルサレムから続く道は大きく3つあります。東へ行く道、南へ行く道、そして西へ行く道です。東へ行く道はベタニアやエリコへ向かう道で、主イエスが宣教活動を行ったガリラヤへ行くにもこの道を通ります。主イエスや弟子たちにとってもおなじみの道と言えます。南へ行く道は、主イエスが生まれたベツレヘム方面へ行く道になります。そして西へ行く道が本日登場するエマオへ行く道で、その先へ進むと地中海に至る道になります。この道はローマ兵がよく通っていたと思われる道ですが、主イエスや弟子たちにとっては馴染みのない道になります。その道をクレオパともう一人の弟子が、主イエスの十字架と復活について語りながら歩いていたというのは、この2人がエルサレムにいるのは危険だと判断して、逃げていたことを示します。逃げるにあたり、ベタニア方面の道はよくわかっているけれども追手がまず探す道であり、捕らえられる可能性が高い。南へ行く道を歩けばベツレヘムまで約10km、途中で追いつかれてしまう可能性がある。そう考えて西への道を選んだのでしょう。彼らにとっては未知の道であり、不安を感じつつも、行くはずのない方向へ行くのが一番安全だと考え、エマオへの道を急いだのです。

そこへ主イエスが現われました。しかし彼らが主イエスだとはわからなかったというのです。主イエスには今まで何回も会っていたはずですから、姿を見て何故分からなかったのでしょうか。この二人だけではありません。復活された主イエスが現われたとき、それが主イエスだとは分からなかったという箇所が聖書にはいくつか出てきます。これは、もちろん彼らの目が悪かったとかいうことではありません。主イエスが十字架にかけられて、彼らは大いに失望し

ました。その悲しみは簡単にはぬぐい去ることが出来ないほど深いものだったということなのです。主イエスが十字架にかけられて亡くなってしまったという悲しみは、簡単に回復することが出来ないほど深く、人間の力ではもはや喜びを見出すことは不可能であったということなのです。だから彼らは主イエスを認めることが出来なかったのです。

夕方となり、共に食事の席についた彼らはパンを裂く主イエスの姿を見てようやく主イエスだと分かったとたん、その姿が見えなくなったと記されています。主イエスは彼らと何度も食事を共にしたことがあったのでしょう。その仕草や主なる神に感謝する様子を見て彼らの目が開けたのでした。主イエスが一緒にいてくださったのに自分たちは分からなかった、彼らがそう思ったとき、主イエスは姿を隠されたのでした。もはや言葉も姿も必要なくなったからでした。主は命を失いそれで終わってしまったのではなかった。十字架によってこの世の権力や悪に打ち負かされはしなかった。主は生きておられる。主は真実でおられる。彼らの心に勇気と希望が溢れました。もはや何も怖いことはありませんでした。夜の闇も恐れませんでした。すでに暗くなっていたにもかかわらず、彼らは喜んで11kmの道のりをエルサレムに引き返し、共に復活の主に出会った喜びを分かち合ったのでした。その時彼らの心からは、エルサレムから逃げようとしたときに恐れと不安がすっかりなくなっていたのです。

復活された主イエスは、この他にも様々な人達に出会いを果たされました。それは単に主イエスを見たということではなくて、失意の底にある人々が起き上がらされた、主イエスの十字架によって失望していた人、主は大いなる力を持っていたがやはり間違っていた、ローマの権力の前には勝てなかったと考えていた人々に勇気と希望を与えたのでした。十二弟子の中では、最初にペテロにご自身を現されたのでした。ペテロは主が十字架に架かるために捕えられたとき、見捨てて逃げてしまったのであり、後でおそるおそるついていき、仲間だと言われて三度知らないと言ってしまったのでした。ペテロはこの弱い自分をどれだけ悔やんだことでしょう。主は主を否定したペテロに真っ先に現われたのでした。主イエスの復活の事実の前に、弟子たちは力づけられてまた一つ所に集まり、自分達の体験を分かち合ったのでした。本日の福音書の箇所はそういうところなのです。

さて、弟子たち一同の前に現われた主イエスの出来事から本日は四つの点について学んでみたいと思います。

第一に、復活は真実であったということです。本日の箇所でも明らかにされていますように、主は幻影でも幽霊でもありませんでした。キリスト教とは、当時一部の人達が考えたような、混乱した人間の無想や熱にうかされた幻覚に根ざすものではなく、歴史的事実として死に直面し、死と闘い、死に打ち勝ってよみがえった人、それに根ざすものであることが明らかに示されたのでした。

第二に、これは十字架がなくては成し遂げられなかった事実でありました。十字架は主なる神のご計画のうちにあったのです。やむを得ずとられた手段ではありませんでした。そして十字架こそ、主なる神より与えられる永遠の命、そして主なる神より与えられる永遠の愛が見える唯一の場所だったのでした。

第三に、弟子たちに示された復活の主との出会い、そしてその喜びは、彼らのみにとどまっているのではなく、すべての人にもたらされていったのでした。すなわち、復活の主の証人となった人達は、皆その真実を伝えるために世界中へ伝道することになっていったのでした。失望と悲しみの時は過去のものとなりました。今や喜びの訪れが、すべての人々にもたらされなければならないのです。これは弟子たちに与えられて使命だったのであり、そして教会が今日まで受け継いでいる使命に他なりません。

第四に、時があることが示されました。弟子たちがこの使命に当たるためには、今までの弱い自分では不可能でした。そのために聖霊の賜物が与えられる必要があったのです。霊の賜物は彼らをはげまし、力付けたのでした。すべてのことには時があり、主なる神より示された、主なる神の決断によって定められた時を待ち望む必要が教えられております。

私達の中に与えられた復活の事実と真実、それを伝える使命が私達一人一人に与えられているのをよく覚えたいものであります。